
寂しいと兎は死ぬ

エクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寂しいと兎は死ぬ

【Nコード】

N7134Z

【作者名】

エクス

【あらすじ】

感情も家族もない天涯孤独な主人公、獅子ヶ原守が兎を拾い徐々に感情を手にいれていく話。
オタネタが結構多いかもしれません（笑）

プロローグ（前書き）

読んでくださると嬉しいです

プロローグ

孤独ってなんだろう？

ボツチでいることが孤独なのだろうか？

寂しいって感じたなら孤独なのだろうか？

そんな俺の物語

§ § § § § § §

小学校卒業の前日の事だった

事故で俺、獅子ヶ原^{しがわらまもる}守は父を失った

事故なんてしょっちゅう起こってることだ

それが身内で起こったただけだ

悲しみなどはなかった

……今思えばやっぱりこの頃の俺は冷めてたんだな。

母は俺を産むと同時に死んでいる

親戚はいない

本当に呪われてんじやないかと思えるな

俺は天涯孤独の身となった

施設に入るかと言う話がきたが断った

俺は寂しさというものをもっていなかった

いや、寂しさだけじゃない、感情そのものがなかったんだ

とある・・・わけで金は座っていてもどんどん入ってくるから金に困ることはなかった

感情のないまま本能に従って中学二年間を過ごした

朝遅刻するのは当たり前、授業もサボりの常習犯、だけど成績だけは常に学年トップだったから先生に怒られることはなかった

そんな事に不満をもって絡んでくる奴も少なくなかった

俺はそんな奴の相手をしているうちに孤独な不良の地位を手に入れたけどどうでもよかった

あの頃の俺は何も考えてなかった

あのウサギが転校してくるまでは、な

第1羽

神様は何を考えているんだろうな

§ § § § §

中学三年の二学期の始業式の日、俺は珍しく式に間に合ってしまい、校長のありがたい(?)長文を聞いていた

「夏休みはどうでしたかね。1、2年生は部活や恋愛3年生は受験勉強に忙しかったと思います(以下略)」

しかし俺のまわりは

『なんで獅子ヶ原が来てるんだ』

『しつ、よせ聞こえるって』

『それにしてもホントに珍しいね』

『触らぬ神に祟りなしだぞ』

と俺が来たことに驚いてることが多かったのだ
全部聞こえてるのにバカなのだろうか

とそんなどうでもいいことを考えている内に式は終わり教室に戻る
ことになった

教室に戻ってから夏休みにサーフィンにでも行ってきたのかと言えるほど黒く焼けておりムツキリとした担任教師、えーと名前は……
とりあえず皆から筋肉先生と呼ばれている先生だ
その筋肉先生が

「みんな、きいて驚け!!なんと転校生だ。」
とドヤ顔で言い放った

ざわざわと教室に広がった

「せんせー、おと「女だ」」

誰かが定番とも言える台詞をいったが言い終える前に筋肉が先手をうった

「かわ「よし、入ってこい!!」」

この教師は人の話を聞かない

ガラッ

教室の扉が勢いよくあけられた

そして身長は150センチ弱、髪は黒で兎の髪飾りをつけて、目がぱっちりとしてる一般的に可愛いと呼ばれる部類の女の子がはいってきた

……眼帯をしてだ

「じゃあ、自己紹介をしてくれ」

筋肉が言いきると同時に少女も口をひらいた
だが普通の自己紹介とは言い難い自己紹介でだ

「我が真名はデーモンオブラビット、あの世から参った。こちらの

世界での仮の名は唯野兎、呼ぶときはどちらでもかまわないよ。」

そして名前を名乗り終えた少女は

「刮目せよ」

と眼帯をとり金色の目をみせた

恐らくカラコンだろう

「我が眼はラビットアイ、この眼にみせられたものはもうこの世には帰ってこれぬだろう。クックック」

……これが邪気眼厨二病ってやつか
かわりたくないな

ちょっと周りを見渡すと、他の人もそんな顔をしていた
いや、どっちかって言うとな俺と関わりたくないってか

「まあ、よくわからんが好きなどこ座ってくれ」
筋肉は対処の仕方がわからないらしくスルーしていた

と、そんな時に俺と転校生の目があった

「!」

そして転校生はわざわざ俺の所までよってきた

「クックック、おにいちゃ……お主、我が眼にみせられたな」

何いってんだこいつは

『おにいちゃ?』

周りは俺とは違う部分に興味をもったようだ
俺はどうでもよかったが

「は?」

ちよつとドスの効いた声で反応をすると

「うう、お、お主、我が眼にみせられたな」

……なんでやりなおした?

それにちよつと涙目になってしまった

「……………先生、席がわからないそうです」
俺はめんどくさかったから筋肉になげた

「ちよ、なんで、無視するう?」

やっべ、目の前の少女が泣きそうだ
くつそ面倒だな

ええーと、この前カツアゲされてる奴を助けてやったときにそいつ
が言ってたこと言ってみるか

「ごめんなさい、こんなときどんな顔をしていいのかわからないわ」

『綾波!?!』

おお、反応多いな

そんなに有名な台詞だったのか

俺はせっかく助けてやったのにこんな事しか言わなかった奴をとりあえずぶん殴って放置した

「……笑えばいいと思うよ」

『対応してきた!?!』

????俺にはよくわからなかったがこうゆうもんなのか?

「で、なんの用事だクソガキ」

もう、本当にめんどくさかったから少し脅しぎみに聞いた

「うう、そなたは我が眼にみせられたから我が下僕になることを許そう」

「ああ!?!」

「ふ、ふえ、ふえーん」

ついに泣き始めてしまった周りの俺を見る目がうざいな

「てめえら何みてんだゴルァ、てかさつさとテメエも泣き止め!?!」

「グスツ、下僕になつてくれるん?」

「ああ!?!」

「うえーん、おにいちゃんが怒ったあ」

本格的に泣き始めやがったそれにおにいちゃん?

「だれがおにいちやんだ！？俺はお前の兄じゃねえぞ
自分が何言ったか気付いたらしく

「別におにいちやんなって言ってないもん」

と赤くなつて訂正してきた

そして少し落ち着くのを待ってから

「で下僕になつてくれるん？」

と再び尋ねてきた

「だれがなるかよそんなもん」

「うう」

でまた少し間を開けてから「なら、友達ならなつてくれるん？」
と顔を真つ赤にしながら尋ねてきた

その質問に俺はニツコリと笑い

「イ・ヤ・だ」

と告げてやった

少女はびつくりしながら

「なんでだめなん？」

ときいてきた

「俺は他人とつるむきはねえ」

と思つたままの事をいつてやった

「……孤独をかつこいいと思ってる厨二病なん？」

イラッ

「そりゃ、テメーのことだろうが！！金輪際俺には近づくな！！」
少女は悲しげな顔をしながらあいてる席に向かった

『気にすることないよ』

『私達が友達になってあげるからさ』

『あんなやつ、二度と関わっちゃいけないよ』
とまわりの人に慰められている

俺はさっさと退場することにした

「先生、帰ります」

「おお、そうか。気を付けろよ」

『お前本当に教師か！？』

緩い先生で本当に楽だ

俺はそのまま帰るのも暇でゲーセンによってから帰った

第2羽

次の日

俺はなんでこりずに遅刻しないで行ったんだろう

「おはよう」

教室に入ってから珍しく俺に挨拶をしてくるバカがいた
どこから声がしたかと捜したら、声の主は俺の席に座っていた

そつ、あの唯野とかいった少女だ

「クツクツク、やっときたか我が下僕よ」

こりねえ、奴だな

「邪魔だ、どけ」

「なんでそんな敵対心むきだしなん？」

「別に敵対心はだしてねえぞ。邪魔なもんに邪魔だといったただけだ」

「うう」

唯野は悲しげな顔をしながら自分の席に戻っていった

§ § § § §

それから唯野は休み時間のたびに俺の席に寄ってきて話しかけてきた

最初はうるさいと追い払ったが次から無視したのがいけなかったか
一方的に話しかけてくるようになってしまった

なんでこんなになつかれたかな？

「クツクツク、我が下僕よ、我に供物をささげよ」

「ああ！？」

なんでたろう、この言葉ばかり使ってる気がする

「うう、ご飯忘れちゃった」

なんだそういうことが

「ホラよ、食べ」

俺はもってきた手作り弁当をやった

「え！？」

さっきまでと違う態度に戸惑ってるようだ

「…………ツンデレ？」

「ちげーよ！？何でお前はたった一つの親切で人をツンデレにする
んだよ！？いいからありがたく食べ。そして俺にこれ以降近づくな」

「お弁当ありがとう。でも近づくなってのはやだ」

ほんと、こいつは俺の何がいいんだろうな？

「守、自分の分は？」

いきなり下の名前で呼んできやがった

ほんと、なんなんだよ……

「ねえにきまつてんじゃねえか」

「え？」

びつくりしたように俺と弁当を見比べる
それから何を思ったか

「あーん」

とタコさんウィンナーをさしだしてきた

『！？』

どうやら驚いたのは俺だけじゃなかったらしい

「あーんつてば」

「ああ、いらねーよ」

俺は断ったが

「あーんつてば！！」

なぜか押されてしまって迷ったあげく
グウ

と俺の腹の虫がなってしまった

「はい、あーん」

「くそっ」

俺はしぶしぶたべた

『キヤー』

周りからはなんともいえない声があがった

「おいしい？」

バカなのかこいつは

「俺が作ったんだからうまいに決まってんじゃないか。お前の手柄じゃねーよ」

「そうだったね」

テレッとしながら

「お主の供物、満足じゃ。明日からも我に捧げるがよい」

「はあ！？俺に毎日作れってことか！？」

「……うん。前の学校給食だったし弁当の作り方わからないもん」

だからって普通他人に頼むか？

「ちっ、しょうがねーな」俺はお人好しなのか

『ツンデレ』

ブチッ

「だれだいま俺を変な名称で呼んだバカは！？表にでやがれ」

でるわけもなく昼休み終了のチャイムがなった

で、結局今日は最後のホームルームまでやって帰った

この時俺に感情が出始めた事に俺はまだ気付いていなかった

第3羽

「我が下僕よ、主の俗世における魔道具の契約番号を我に教えるがよい」

登校一番にそんなことを叫ばれた

……魔道具ってなんだよ

よし、帰ろう

「人違いです」

回れ右をして俺は帰り始める

「ちょー！なんで無視するん！？」

後ろから自称魔眼持ち（笑）が追ってきた

よし、前に絡まれてたところを助けてやった奴（二回目）がのたまってた事をいうか

「逃げちゃダメだ」

『いう場面ちがう！？』

ホント、律儀なやつらだな

「……あなたは死な（以下ry」

『悩んだ結果それ！？』

次は財布を落として困ってた奴（絡まれてた奴）がいった事だ

「ただの人間には興味ありません」

『今度はハルヒネタ！？』

「私は……じゃなかった我はただの人間ではないぞ」『そうですね』

「でもお前は唯野じゃねーか」
『そうですね!!』
もう面倒だし話を進めるか

「で結局なんの「ホームルーム始めるぞ」……………」

筋肉が空気を読まずに話を中断させた
しょうがなく俺は教室に入っておとなしくホームルームをうけた

§ § § § § §

「我が下僕よ、主の俗世における魔道具の契約番号を我に教えるがよい」

筋肉が出ていった途端唯野はやり直してきやがった

「……魔道具つてなんだよ」

「この事だよ」

そういつて懷からケータイを取り出した
めんどくさい奴だな

「ほらよ」

「!?!」

素直に出した俺に驚いているようだ

「ツンデレ？」

「だからちげーよ!?!なぜいきなりツンデレになる!?!」

「えっと、赤外線のやり方はと、」

「話を聞けよ!?!」

唯野はうーんとうなってからやっと思つけた赤外線のやり方に喜んでいる

「できたよおにいちゃ……我が下僕よ」

「俺はお前のお兄ちゃんじゃねーぞ。てゆーか間違えるなよ」

俺がお兄ちゃんと口にした途端唯野の顔が暗くなった。あまり触れていい話じゃないようだな

「まあいいや、それとほらよ。今日の弁当だ」

「!」

「昨日自分が言ったんじゃないか。弁当作ってこいと」

心底嬉しそうな顔をして

「ツンデ「それ以上いったら没収だぞ」……ありがとう」

余談だがその日から俺の異名は『孤独な不良』から『ツンデレマニアック』に変わった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7134z/>

寂しいと兎は死ぬ

2011年12月25日22時04分発行